

## 2021年度 子どもシェルター全国ネットワーク会議の通常総会

2021年9月13日、同会議の通常総会がZOOMで実施されました。昨年度の事業・決算の報告、今年度の事業・予算計画案の承認、そして子どもシェルターの第三者評価のプロジェクトチーム(P T)の立上げが検討されました。児童養護施設等の第三者評価制度は2004年に始まり、2016年には3年に一度の受審が義務化されました。全国の児童相談所や一時保護所に対する第三者評価も各自治体で広まる中、今年、日本初の児童相談所と一時保護所の第三者評価をおこなう専門的な評価機関「日本児童相談業務評価機関(J-0schis)」が設立されました。そのため、いずれ秘密性の高い子どもシェルターにおいても第三者評価は必要となるであろうし、そうであれば、子どもシェルターの実情にあったもので現場の活動を後押しできるものにしていこうか、互いに各シェルターの現状を知ることから始める必要があるのではないかといった意見が出され、P Tの立上げが決まりました。ぬっくもP Tに参加します。

## ぬっく活動カレンダー

2021.7~2021.9

- 7.14 八尾市じんけん楽習塾「ぬっくの活動と子どもたちの実情と支援」のテーマで講演
- 7.14~16 第13回H20 サンタ NPO フェスティバル参加
- 8.19 LIFULL HOME'S ACTION FOR ALL えらんでエール  
LIFULL 株式会社社員向けオンライン講演
- 8.19 寮美千子さん(作家)の講演会「あふれでたのは やさしさだった」を実施  
(大阪弁護士会子どもの権利委員会共催)
- 9.14 大阪はなみずきライオンズクラブの定例会にてミニ講演

## たくさんのご支援、ありがとうございます!

【ご寄付等くださった方】(順不同) 4月1日~9月15日

橋本伸明様、鈴木朋子様、和久易子様、村上周様、平内さくら様、梁本康朋様、矢口敬子様、鍋倉義明様、河内山淳子様、平野由美子様、佐久間ひろみ様、宮地光子様、近藤啓子様、松原薫子様、中塚恒子様、松井千恵子様、木村百合様、鎌田ユリ様、雪田樹里様、小原修様、株式会社大阪ガイドセンター代表取締役大平喜美子様、中畑卓明様、濱田富美子様、迎純嗣様本田司法書士事務所様、金澤修子様、長谷川民子様、中村年子様、渡邊かおり様、李原絵様、野澤佳弘様、西村淑美様、山路史高てるうさファーム & キッチン様、山口雅子様、奥村健様、田中博子様、金井香苗様、吉川敬子様、宮崎誠司様、笹川悦子様、猪口絵莉菜様、乾真希様、桑山春恵様、齊藤正実様、北嶋紀子様、坂元京子様、櫻井恵子様、妹尾波枝様、荒木温子様、株式会社 葛城建設様、祐照寺住職 古川真照様、金丸英俊様、種子田穰様、入江由美子様、西川智子様、矢田恵子様、伊東裕子様、加藤豊子様、宇田康子様、塩田千恵子様、藤田怜様、BLUE LUG 石塚直人様、最光寺の皆様、柳元和・晴美様、田上智子様、武田大信様、株式会社アースコンサルティングオフィス代表取締役、神田加奈様、栄照寺住職 木村慶司様、一般財団法人H20 サンタ様、大阪ホームサービス株式会社 代表取締役 穴見孔治様、国際ソロプチミスト大阪 - 梅田様、豊生肥料株式会社様、大東中央オータリークラブ様、公益財団法人毎日新聞大阪社会事業団様 他 39 名



News Letter Vol.11

2021年11月

## ご挨拶

いつもぬっくを支援くださり、ありがとうございます。ぬっくの活動を始めてから、改めて、自立とは何か・自立に向けてどう支援すればよいのか、なぜ働くのか・なぜ働かないのか、なぜ生きるのか・死にたいという子どもにどう言葉をかけたらいいのか・どうチームを組んで接していったらいいのだろうか等と、考え続けています。なぜそんな風に捉えるのか、なぜそこで嘘をついてしまうのだろうか、なぜ…。考えだしたら、なぜが止まりません…。理解したいのですが、子どもも十分に言葉では表現しきれないことも多いです。子ども担当弁護士(コタン)は、生活を支える職員さんの声や、運営会議などを踏まえて、方針を打ち出すことが求められます。しかし、一人暮らししたいという子どもの希望を支えようにも、さまざまな課題があり、どこから手を付けていいのかわからないと思うこと

もあります。そんなとき、職員と運営委員とで個別に相談したり話し合ったり、時には精神科医の方に参加いただいて、悩みながら進めています。また、退去後についても、コタン一人ではとても支えきれません。そのため、退去後にも、定期的に訪問・声かけして、SOSを拾い上げ、生活支援をしっかりと実施するため、ボランティアの方(ぬっくメイト)に加え、社会貢献支援員やCSW(地域の社会福祉法人の職員)、居住支援法人等と連携して、チームで対応する取り組みを始めました。また、子どもシェルターや自立援助ホームの入居中や退去後を支援するボランティアの方を募集するため、11月にはオンデマンドでのボランティア養成講座を実施する予定です。その他、今年度は、ホームページ改訂のため月1~2回の打合せを重ねており、認定NPO法人の申請も準備中です。今後とも、どうか温かいご支援をよろしくお願いいたします。

(理事長 森本志磨子)

## ご支援のお願い

**正会員** 入会金 5,000円  
年会費 5,000円  
**賛助会員** 年会費 個人 1口 3,000円  
法人 1口 10,000円

※ぬっくの会員登録は4月から翌年3月の1年単位です。年度途中でご入会された場合でも1年分の会費をいただいております。※便利なクレジットカード決済をご利用ください。(手続した月日に、以後年1回自動決済)

**マンスリーサポーター**  
になってください!

- 毎月1,000円～
- 月1回自動決済

## 現金・物品寄付

- ・「お箸」「マグカップ」「バスタオル」(扱いやすく、若者向けのシンプルなもの)
- ・「お米」「お菓子」(入居中や退去後の子どもたちのために)など

物品のご寄付は、一度事務局へご連絡ください

ご入金・会費、ご寄付の振込先

三菱UFJ銀行 梅田新道支店 普通預金 0206469  
特定非営利活動法人子どもセンターぬっく

ゆうちょ銀行 ○九九店 当座預金 0208341  
特定非営利活動法人子どもセンターぬっく

会員登録は、ぬっくHPか、QRコードからアクセスできます



# 子どもシェルターぬっくハウス 『Staff Voice』



ぬっくで働く  
スタッフのお話を  
紹介します!

## 作家 寮美千子さんの 講演会

8月19日大阪弁護士会2階  
(大阪弁護士会共催)

寮美千子さん著者の本▼



### 帰り際の声かけを通して

初めての勤務を終えた日、リビングで過ごす子どもたちに帰ることを伝えると他児が「バイバイ」と返してくれる中、一人の子どもが明るく手を振り「ありがとう!」と言ってくれました。感謝できる状態で過ごしているのかなと思う反面、大人への気遣いや自身の心を支え守る力も感じられ複雑な思いがしました。その後どんな人にも毎回そう返していたので彼女にとっては何気ないことだったのかもしれませんが、過酷な経験から前へ進む精一杯だったのではと今も時々思い出します。帰り際の声掛けはその時の心情がよく現れる一瞬でもあります。玄関までお見送りしてくれる時、嬉しいことがあり笑顔で元気よく挨拶してくれる時、自分のことではいはいで目も合わせず反応のない時、辛い状況をなんとか耐えてる目線を送る時、いろんな覚悟を込めてハイタッチで応えてくれる時…。次来たときはどんな表情で会えるかな、と楽しみと心配と応援の混じった気持ちで玄関を出ます。

### 自分のできる役割を探し続けて

私がぬっくボランティアの活動を始め、非常勤職員となったきっかけは、法律の専門家である弁護士さんが、苦しい状況にある子ども達のコタンとなり支援活動に力を注がれているのを知った事でした。スタッフとして、まだ一歩踏み出したばかりですが、仲間のスタッフやボランティアさん、子ども達との日々の関わりの中から気付きと学びを得、出会いや繋がりに感謝しながら、自分にできる役割を探し続けていきたいと思っています。

### 子どもたちからの贈り物

ぬっくで子どもたちをスタッフとして見守るようになり二年半になりました。何とか安心して休める居場所にたどり着き、傷ついた羽を休めている中でも、子どもたちは大人に永遠に感じられる優しさとぬくもりをくれました。「お世話になりました、ありがとう。」これほどに心のこもった手紙や手作りの作品をもらったことがあったのか、自分の人生を振り返らないわけにはいきませんでした。私たち大人が、小さなことからみんなで手を繋ぎ、大きな優しさとして子どもたちに何が出来るかを考えていきたい。そして、子どもたちとの出会いと、優しさとぬくもりのつまった宝物は、子どもたちから、支援という立場で係る全ての人たちへの素敵な贈り物だと思っています。



### ぬっくハウスのごはん

いつかの朝ごはん。タコさんウインナー小さな焼きサバに玉子焼き。たまにハート形の玉子焼きも作りますが、タコさんと一緒に無言で食べられちゃう(ノド)でも、心の中では喜んでくれたら良いなと毎日スタッフ、ボラさんは色々考えて作ります♪



### ご寄付いただいたもの



いつもぬっくをご支援くださり、ありがとうございます! 今後も温かいご支援を、どうぞよろしくお願い致します。

コロナのため2年越しでようやく講演が実現、リアル参加は約70名、ウェビナー参加は約226名でした。寮さんは、奈良少年刑務所において、約700名の受刑男子(17~25歳)のうち、特に刑務所作業が手順とおりにできない10名を対象に、月1回、半年から8カ月で終了する「社会性涵養プログラム」を2007年に開始し、7年間実施されたそうです。毎回、受刑男子10名と大人5名(刑務官2名、教育統括官1名、寮さん夫婦)のメンバーで、円になって、最初は「絵本の朗読」から始まり、続いて、詩を自作して順に発表して感想を出し合う詩の会へと進んでいきます。

1回目は「おおかみのこがはしってきて」(文:寮さん)というアイヌを題材にした絵本の朗読をコスプレして順に実施し、読み終わると大拍手で終了。最後には自主的に手が上がるようになり、「緊張したけど最後まで読んでよかったです。」との声。ここでは、「君ならできるよ」といった励ましがしんどいとの話があり、励まし一つとっても慎重にしていかなければと思いました。2回目は宮沢賢治の絵本の朗読。いろんな役を分担し、掛け合っの朗読会。一人が(やりたくない)と首を振ると、職員が「やらないという選択肢が増えたね。」と声かけがあり、その後、この子は「信用できる大人が増えました。」と語ったそうです。また、大人の間で「いいよ、後で」といった助け舟を出すのはやめましょう、という話になり、それを実践していると、子どもたちから「小さいときに〜だった」「僕もそう思います」など生の声が自然と少しずつ出てくるようになったとのことでした。「待つ」とはということなのかを、改めて考える機会となりました。

また、プログラムの目標の一つは「点数をつけない、評価しない」ということにあり、「褒める」ことも評価の一つであるとお話がありました。「褒める」こ

とは、その行為を推奨する意図を伝えるのと同じ。「共感はあるが、深追いしない。」というスタンスを貫く。そうすることで「選択の自由がある、好きにできる」という状況ができ、「評価されないとすごく安心する。」という声につながる。褒めることは自己肯定感を支えるために有益なことですが、もっと意識的に注意しておこなう必要がある、と考えさせられました。詩の朗読会では、「書くことがないときは、書くことがないって書いていいんだよ」との職員の声。2回目、3回目と、「書くことがない。」と書く子が出てきます。それでも大人は、顔に書いてほしいということを出すことなく、受けとめ続けます。朗読会では、クラスみんなで一人ひとりの詩を朗読します。「みんなで朗読すること」それ自体が、受けとめられているという感覚を与えることにつながり、その後感想を出し合います。そうしていると、周りの友だちがいろいろ心を開いて話し出すのを見て、自分もちょっと心を開いてみようかなと思い、少し心を開くと、宝石のようにポロンと思いがあふれでできます。下を向いて小さすぎて聞こえない声で朗読していた子が、自分の詩をみんなとともに朗読してみんなから大拍手を受けた後、一言、母の死を語り、こんな自分が生きてはいけなかったことなどを話します。すると、周りから「詩を書いて、親孝行だと思う」等の温かい声。どんどん自主的に手が上がり、次々と温かい言葉があふれだす。こうして、この子は、公の場で親の居ない寂しさなどを話せたことがきっかけとなり、徐々にみんなと話せるようになり、今は、周りの子の相談を聞いたりするまでになったそうです。

こうして“あふれでたのはやさしさだった”と感じるまでの過程が、エピソードとともに、熱のこもったストレートな言葉で丁寧に語られた講演会。熱いものがこみ上げ、心に沁みる時間でした。